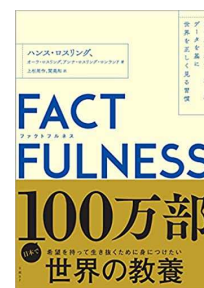


『 FACTFULNESS 』

「この世界の人々は、とんでもなく世界を誤解している...」これは、スウェーデンの医師及び公衆衛生学者のハンス・ロスリング(1948-2017)の言葉であり、彼のライフワークとなったものです。教育レベルの高い人も、世界中を飛び回っているビジネスマンも、ノーベル賞受賞者でさえ、事実に基づいて(ファクトフルに)世界を見ることができていないと言うのです。ハンスによると、その原因は人間誰でもが持っている10の本能によるものだそうです。事実に基づいて正しく世界を見ることができなければ、社会問題を解決することも、未来を予測することも、危機に対応することも、、、とても難しくなってしまいます。そこで私たちは、ハンスの言う10の本能を理解し、本能が引き起こす勘違いに気付くことが、ファクトフルな世界の見方=ファクトフルネスにつながるのだそうです。

ファクトフルネスに世界の姿を見られるようになると、一方で、ファクトフルネスに自分の姿も見られるようになるのではないのでしょうか?知識不足な自分、焦って間違っただ判断をしてしまう自分、他人をステレオタイプにはめてしまう自分、、、ファクトフルネスは、そんな自分に気付かせてくれるものでもあるのだと思います。Society5.0と呼ばれる超スマート社会の到来で、情報の入手は容易になり、なおかつ個人からの情報発信も簡単に出来るようになりました。「マスコミや政治家が言うことは信用できない」と思えば、ネットで検索すればすぐにもっともらしい「真実」が見つかります。たとえ見つからなくても、自分が考えた「真実」をネットで発信すればいい。ただ、それらの真実は事実に基づいているとは限りません。玉石混交の情報であふれている社会を生きるには、情報を疑う力や自分の頭で考える力とともに自分自身を批判的に見る力も欠かせないのではないのでしょうか? 一歩立ち止まって物事を俯瞰してみる。対立の主張を精査してみる。その事実は信頼できるものなのか、、、これから大海に出ていく皆さんに、少しでも参考になれば幸いです。



～ハンス・ロスリング・オーラ・ロスリング・アンナ・ロスリング 著、上杉周作・関美和訳、「FACTFULNESS」、日経BP社、2019～

6組担任 志村 奨

『 「WHAT」で考えてみる 』

先日、山梨日日新聞の「理想の職場の作り方」というコラムに、「WHY より WHAT で」というタイトルの記事が載っていました。筆者の内田和俊さんによると、「部下が失敗したり物事がうまくいかなかったとき、上司はWHY で始まる質問をしてしまいがちだが、これは心理学的には「クローズ型の質問」に分類されてしまう。なぜなら相手が責められているような気になり、心を閉ざしてしまうからだ。すると相手は言い訳や正当化ばかり話し始め、本来こちらが聞きたい原因や理由を引き出せなくなってしまいます。」ではどうしたらいいか。「WHAT で始まる質問をすることだ」というわけです。

これを read するとき、職場だけでなく私達自身にも当てはまるのではと思いました。物事がうまくいかないとき「なんで」で考え始めると、その後には「失敗しちゃったんだろう。」が続き、さらにその後には「私の性格が悪いんだ」とか「能力が足りないんだ」とか、悪い思考のスパイラルに入ってしまうがち。そこで、「何が」で考え始めると、「原因だろう」が続き、その後にはより具体的な方策が出てきそうな感じがします。うまくいなくて落ち込んでいても、今度はこうしてみよう、と次の一歩につながりやすくなるのではないのでしょうか。「なぜ〇〇してしまったんだろう」→「〇〇してしまった理由(原因)は何だろう」と考えるようにする。頭の片隅に置いておいて、何かの折には役立ててみてください。

いよいよ私立大学、国公立大学2次試験受験の始まりです。受験中は一人だけれど、後ろで家族、友人、先生方が支えています。何より一緒に苦楽を共にしてきた西高の仲間がそれぞれの場で頑張っています。それを励みにあと少し、力を尽くしてください。

6組副担任 風間 富美子